Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-16

<紹介及批評>大熊信行氏著『經濟本質論』

宮田, 喜代藏

(Citation)
国民経済雑誌,64(3):424-427

(Issue Date)
1938-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00055310

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00055310

紹介及批評

大熊信行氏著『經濟本質論』

理論經濟學の基本的研究はいつでも經濟本質論に觸れてをり、價値論の如きは一面かうした役割をつとめてゐたものである。只從來はこの經濟本質論としての性格が充分自覺されなかつた爲に、基本的な經濟原理の意義が明確にされず、ひいてはその實踐的効果が充分現はれずに終つたのである。しかし今日の經濟轉換期におけるほど經濟本質への反省の必要なる時はない。この時の經濟學は、經濟本質が新情勢を地盤として如何なる形態で具現するかを說明し、進んで新時代の經濟生活を正しく指導するといふ任務を意識させられ、このため今迄等閑に附せられてゐた經濟本質論が全幅的に顧みられねばならなくなつた。かゝる時に當り大熊信行教授の新著「經濟本質論、配分と均衡」をえたことはわが學界にとつて大きな欣びである。本書は教授が「マルクスのロビンソン物語」（昭和四年）及び「配分理論」（昭和五年）を公にされて以來、七ケ年間にわたる研究の成果を統一的に整理されて上梓されたものである。

第一章は配分概念を明確にうち樹てることを目的とせるもので、全卷の礎石をなすものといへよう。茲では配分法則の性格が縱橫に描き出されてゐるとともに、經濟生活の本質的規定の意義が明かにされ、經濟學の研究方法が反省されてゐて、理論經濟學一般に對する教授の根本的態度が鮮かに展開されてゐる。教授がその廣い豐かな生活直觀の上に立ちつゝ、練磨された強い理論を武器として使驅されてゐる姿は、全卷至るところに見られるが、殊に本章において悠大に迫つて來る。第二章は價値論を放棄して價格論のみをもつて一貫したと自稱するカッセル教授の體系を吟味したうへ、この體系を全的に支配する稀少性原理のうしろにやはり過去における價値論の總體が、配分原理として作用せることを論證せるものである。第三章はアダム・スミスの分業論を主題として

ねながら、國富論から配分理論をさぐり出したものであつて、本書中最も貴重な貢献である。嘗つてマルクスの資本論から配分原理たるロビンソン物語を導き出したと同巧異曲のものであつて、教授はかくして「近代經濟學の諸體系はいづれの學派たるを問はず配分原理の脊柱なしには形成されないこと」を明示した。第四章はイギリス經濟學において使用價値と交換價値とがいかに變還せるかを分析しつゝ、その價値論の目標が常に交換價値の一般的說明にあり、この價値の語義は終始不變であつたことを論證し、ひいて價値論がその對象をこれ以外に求めること、又はこの歷史を無視して新しい價値概念を創造することを警めてゐる。最後の章はツガンの價値學說綜合の試み及びこれに對するブハーリンの批判を吟味せるものであるが、これは配分學說を介して兩學說の內的關聯を論證せんとする教授の方法と對照されて、配分原理の問題の在り所が洵に明確に浮び上つてゐる。

いま本書の主要內容をなすものは「經濟本質の問題及びこれと關係する限りでの價値問題であつて」、教授は配分原理を展開することのうちにこの問題を解決してゆくことを主題としてゐる。さらに本書の辿れる道から見れば、「第二、第三章は既存の經濟學體系のなかに配分學說を檢出する方法をとり、その他は價値論から入つて配分學說に到達する道を選んでゐるが、」いづれも理論經濟學における先人の業績を承けつゝこれを正しく吟味することによつて、配分原理のうちに經濟の本質を把握せんとする心構に至つては共通である。

本書においては經濟の本質を確立するものとしての配分觀念がうち樹てられてゐるが、吾々は經濟本質を生活實踐の形式たる配分として把握することのうちに、教授が經濟のもつ本來の意志的、規範的な性格を充分顧みてをり、從つて經濟學を實踐科學と解してゐる根本的態度を見るものである。この場合配分觀念による經濟の本質規定の仕事に手引きをなしたものは經濟と技術との基本的關係に就いての理解である。筆者の見るところでは、曾つて經濟の本質は自然との區別において明かにされ、又文化一般のうちで法律其他と對照的に明かにされた

が、いまそれが配分なる實踐生活の形式又は方法的なものとして確立されんとするに至つては、從來經濟學において實踐的方法を取扱つてゐたいはゆる經濟原則についてそのうちから經濟と技術とを識別するといふ工作を必要とするに至つたのである。かうして經濟本質は益々深く明確に規定されるとゝもに、茲に新時代の要望に應へる實踐科學としての經濟學の基礎づけとして堪へうるに至つたので、一つの進歩と言はねばならぬ。

然るにこの實踐的原理としての配分原理は個人的な範疇から社會的範疇へ發展しつゝ、その重要性を增して來てゐる。自由主義秩序においては、個人的範疇としての配分原理は實踐的な行動原理であつたが、社會的原理としては無意識的、自動的な傾向法則であつた。しかるに今日の統制經濟の進展下においては社會的原理としての配分原理が一部的に規範原理として作用してゐるし、やがて計畫經濟の秩序の下においては「社會的な經濟配分がその意識的中樞機關をとほして實踐」されるから、社會的配分原理の實踐的規範的性格は全部的に顯はされて來るであらう。この事からして配分原理が、今日及び明日の理論經濟學において占める地位の重要性は自づから明かとならう。まづ一方「配分學說が理論的完成をみるためには、社會的生產が意識的統制の形態にまで發展してゐなければならない」と同時に、他方この學說は「この世紀の主たる經濟科學的課題たる計畫經濟の理論的體系の脊柱たる重要なる役目」を果たすものと見られてゐる。

吾々は經濟生活の進展に伴ふ配分原理の發展の道を前後に辿りながら、遂にこれが社會經濟における規範的法則として計畫經濟學の脊柱として役立ちうる狀態まで展望するとき、經濟の本質規定を經濟配分から一步遡つて經濟構成を通してなさんとする立場が可能であり又より妥當であると思ふ。經濟の本質的課題を經濟生活が如何に構成されるかの根本問題のうちに把握する吾々にとつては、配分は卽ちこの經濟構成の實踐形式である。敎授は「配分は經濟實踐の基本的形式である」と主張されてゐるが、その深い意味は以上の如く解してより明かにさ

れるのではあるまいか。殊に配分原理を計畫經濟學の脊柱として役立たしめんとする時、本來の經濟的課題が國民經濟の構成にあることを意識することは一層の成果をあげしめるものと信ずる。そしてこの事は配分原理のもつ意義を輕くするものではなく、むしろ本來の經濟的課題をより深く理解し、且つ配分問題の地位を却つて一層明確にする所以でもあらう。尚ほその時と雖も配分原理の展開は、經濟生活がいかに構成されるかの根本問題を解くものとして經濟本質論に屬することにおいて變りはない。

以上と密接に關聯して筆者の感想するもう一つの事は、教授の理論的發展が歷史學派の根本態度に接近を示して來たと感得され、それはやがて歷史的理論との綜合の道を辿ることによつて新しい進展を期待しうるであらうといふことである。「おもふに計畫經濟の原理を考察することは、この世紀の經濟學者のうへに課せられたところの最も大きな課題である」と本書の劈頭に喝破せる教授にして、この計畫經濟の原理こそ國民經濟の構成原理であつて、配分原理はとりも直さずそれの實踐形式であるとゝもに、又この國民經濟構成の問題こそ歷史學派としては本來的な課題であることに思ひを至される時、この二つの自覺から、經濟構成としての把握を介して歷史的理論と合理的理論との綜合の道を見出されるのではあるまいか。（菊判、本文二九〇頁、昭和十二年十月、同文館、定價貳圓貳拾錢）

（宮田喜代藏）

松井清氏 岡倉伯士氏 共譯 『ハーバラー國際貿易論』下卷

一

さきに本邦譯書の上卷（第一部、貿易理論）が上梓された際に、松井榮一學士によつてその紹介及び批評がなされ、同時に原著 G. Haberler : Der internationale Handel, 1933. の全般に就いての說明と評價が與へられた（本誌、第六三卷、第六號）。右上卷の出版後幾何もなくして下卷の上梓を見たことは、兩譯者の絕大の努力の賜で我が學界のために慶賀に堪へない。私自身、邦譯書下卷の出版によつて、改めて獨原著、英譯書及び邦譯書の三册に就いて對照しながら精讀する機會を與へられ、亘